



序 文

今回、講道館柔道科學研究會紀要の第3輯が上梓されることになった。その第1輯は1958年に、第2輯は1963年に出版されたが、いづれも會員各位の精魂をこめた研究報告の集大成であつて、柔道界に貢献する所が多かつた。本書は純粹の學術出版であつて、専門以外の人には興味の上から縁遠い點もあらうが、世界的に柔道が認識されてゐる現在、本紀要の如き基礎的な研究こそ、將來の柔道の正しい發展の上に必要缺くべからざるものであつて、私は講道館の仕事として地味ではあるが最も有意義な分野の一つであ

ると信ずる。柔道もスポーツの觀點からみれば格技系統の範疇に屬するが、廣い意味では他のスポーツとも關連する所が多く、その研究分野は相互に相通ずる所があり、本書の研究内容は他のスポーツ界からも注目され、高く評價されてゐることは當然と言へよう。しかし柔道独自の研究を必要とする分野も多く、とたへば絞めの研究の如きは、他のスポーツに取りあげる必要のない分野であつて、それだけ、柔道にとっては正しい科學的研究として必要であり、第1輯第2輯にはその研究が掲載されてゐる。1965年、第4回世界柔道選手權大會が、ブラジルのリオデジャネイロ市で行はれたが、その際國際醫學スポーツ會議が行はれ、日本代表の松本芳三教授によつて、柔道における絞めの諸研究が發表された。その内容は、本研究會の共同研究によつたもので、ボクシング關係者の多いブラジルの會員には特に關心をもたれた由である。この發表は多くの人の注目を集めた。私は1967年6月に、現米國柔道連盟會長のドクターコイワイから次の様な手紙を受けとつた。「私は醫者からチョウキングの影響について多くの質問を受けました。私は1965年にリオデジャネイロにおいて、日本代表によつて、提出された絞め技の影響について論文を思い出しました。この論文が入手出来るでしょうか」と。氏は病理學のドクターであるが、1967年11月にテキサス州のヒューストンで行はれたアメリカ醫學會の全國會議で、スポーツ柔道についての論文を提出する様要請を受けたと付記されてゐた。その他英國の柔道のナショナルコーチであるグリソン五段からも先年、紀要の送付を要請され、また西獨ボン大學の體育學部長のヴィルト・クレメンズ教授の來館の折も紀要を贈呈して大へん喜ばれた。私は會員諸賢の貴重な諸論文が、柔道の基礎的研究として、國際的にも高く評価されてゐることを考へると、まことに喜ばしく思はれる。

擱筆にあたり、會員の方々の柔道に對する暖かい御理解に感謝し、將來も一層その研究を深められることを願ひする次第である。

1969年9月

講道館長 嘉納履正